

一人の中国人類学者の軌跡を 通して見る現代中国の歩み

西澤 治彦



韓敏著
大地の民に学ぶ
激動する故郷、中国

四六判 232頁
臨川書房
[本体 2000円 + 税]

文献研究に対比されるフィールドワークは、文系理系の垣根を超えて、さらに各デシプリンの違いを越えて、重要な研究の手段であり方法である。それだけに、これまで幾度となく、フィールドワーク論が刊行されてきた。最近のものをあげるならば、学問分野を超えたフィールドワーク論として、『100万人のフィールドワークシリーズ』（二〇一四）全一五巻、古今書院）がある。この企画は学問分野や地域別ではなく、フィールドワークにまつわるトピックごとに編集されており、複数の執筆者による論集となっている。一方、人類学に限定された企画としては、『フィールドワーク選書』（二〇一三）全二〇巻、臨川書店）がある。これは一人の人類学者が自らのフィールドワークを語るというもので、結果としては地域別の編集となっている。本書はこのシリーズの一

冊として、中国を舞台としたフィールド体験が語られている。本企画が人類学に限定されているのには、それなりの訳がある。というのも、フィールドワークは学問としての人類学の根幹をなすものであり、人類学者はフィールドワークに並々ならぬこだわりを持っているからだ。フィールドワークを終えた人類学者には、さらに調査で得られたデータを自文化に照らしあわせながら「翻訳」し、民族誌として記述する、という作業が残されている。ところで、一九八〇年代以降、人類学ではこの民族誌の「客観性」が問われるようになり、民族誌やフィールドワークを巡ってさまざまな内省がなされてきた。そして「個人の作品」としての側面を持つ民族誌を読む際に、その調査者がどのような人物であり、どのように調査されたのか、という民族誌が生まれるまでのプロセスへ

の関心も高まってきている。実際、そうした研究もされてきているが、理想は、調査をした人類学者自身が、自らの調査を語るエッセーを書き残しておくことであろう。本書はそうした動きの一冊としても位置づけられる。

著者は中国の東北地方で育ち、吉林大学の大学院で日本文学を専攻し、修士論文で『源氏物語』の人物論を書き上げるなかで、中根千枝の『タテ社会の力学』を通して人類学に出会う。彼女にとって人類学という学問は、自分自身が体験した社会主義革命の意義を問い直すための道具であった。そして日本の大学院に留学し、義父の人脈をたよって安徽省北部の蕭県の農村に一九九〇年から一年間ほど住み込み、人類学的なフィールドワークを行い、英語で博士論文を執筆した。これを出版したものが *Social change and continuity in a village in Northern Anhui, China* (2001) である。

本シリーズの意図は、人類学者はどのようにしてフィールドワークを行っているのか、そのノウハウや教訓、そしてその醍醐味など、これまで正面から語られてこなかったことを公開することにある。本書の最大の特徴は、ホーム・アンソロポジストによって書かれている点である。中国人研究者の場合、日本人研究者に比べて格段に有利な条件で調査できる、というイメージがあるが、ホーム・アンソロポジスト

なりの葛藤がある。本書を読めば、中国農村での調査は、中国人研究者でも決して容易ではなく、それなりの人脈と後ろ盾がないと難しいということが分る。また、著者が女性であるということも、父系原理の強い中国にあつてはある種の利点となる。本書の随所に、女性の立場からの視点が盛り込まれているが、それは著者も自覚しているように調査者が女性であるからこそ可能となったものである。

その一方で、本書を通読すると、さまざまな「読み」が可能である。表向きには、一人の人類学者の誕生と成長の軌跡の物語であるが、それはまた同時に、めまぐるしく変つてきた中国の現代史とも重なるからである。その結果、本書の随所に見られるエピソードは、現代の中国農村の一断面を伝えるものともなっている。例えば、淮北の地における豊富な麵食、冬の寒さとぬかるんだ土に適した履き物（毛窩子）、漢字で書くことの出来ない方言の語彙、女性の地位（宴会では女性は台所で食事）などは、住んでみないと分らない世界である。村レベルにおける革命の実態という点では、アニタ・チェン他編の『チェン村』（筑摩書房、一九八九）が想起されるが、本書は本人が直接見聞きしたものであるだけに、迫力がある。例えば、この地における土地改革の実態も生々しく語られている。広東や四川と異なり、この地域の土地改革は比較的

穩便に行われ、死者が出ることはなかった。とはいえ、李氏(仮名)一族が多数を占める宗族村にあって、よそから来た工作隊によって地主や富農に認定されたのも李氏であれば、土地を分配される側も李氏であった。貧農の中には一族からの土地の分配を断る人もあったという。新しく選出された幹部九人のうち、李氏が四名を占めたため、階級区分を含め、李氏一族の庇護に大きな影響力を持ったという。土地改革が村の宗族組織にもたらした影響ということでは、本書は、遼寧省を舞台とした聶莉莉の『劉堡』(東京大学出版会、一九九二)の研究を引き継ぐものともいえる。

調査地の蕭県は、国民政府の首都であった南京に近く、国民党の支配地域であった土地の人々は、国民党がまた戻ってくるかも知れないと考え、共産党政権に対して懐疑的であった。実際、土地改革の真の狙いは、地主の土地を貧農に分配することではなく、新しい権力構造を作ることによって、土地の国有化と集団化を実現することにあった。それを実行に移したのが人民公社化であるが、これによって行政と経済組織とが一体化したのみならず、公社組織の軍事化も行われた。公社は軍の組織にならない「団」に、行政村は「大隊」に、自然村は「中隊」に編入される。また小村が大村に合併される中で、人々の強制移住が行われた。村人はこれを「大搬家」

と呼び、当時の悲惨な出来事を語り出す。

悲惨な出来事といえば、共同食堂での浪費、労働力の駆り出しによる減産、生産高の水増し報告によって引き起こされた大飢饉がある。当時、二〇五人の村人の中で、三九人が餓死したという。ある家では、餓死した二人の娘をベッドに寝かせて眠っているようにみせた。食堂から二人分の食糧を得るためだった。当時、村から脱出することは出来なかったが、中にはつてを頼って何とか脱出に成功した人もいた。ある人は、親戚のいる徐州を目指して徒歩で出発するが、途中の村で拘束され強制労働をさせられてしまう。飢饉の原因に対する見解は、村人の世代によって異なるという。即ち、四〇代以下の人はソ連への無理な返済と、三年続いた自然災害が原因であるとする体制側の歴史を語るのに対し、四〇代以上の世代は、体制側の歴史は語らず、地元の幹部の人間性の悪さのせいになっているという。

こうした話は、著者の側から聞き出したのではなく、親戚に対して自分たちの過去を語るように、農民自ら語ってきたことであつた。これをもって「調査の極意」などという評論はしたくない。なぜなら著者は、調査者としてではなく、一人の人間としてどこまで人々と心が通じ合えるか、という人類学者としての根源的な問題を投げかけているからである。

このように、トップダウンで急進的に進められた人民公社の運動は、その初期から農村経済に破壊と混乱をもたらした。世界人口の五分の一が動員された社会主義革命は、為政者にとっては人類史に残る大胆な実験であっても、民衆にとっては個人や家族、そして村が大きく変えられてしまった悲惨な体験であった、としている。

中国共産党は、文革は誤りであったと公式に認めているが、人民公社化や土地改革に対する評価は変えていない。その意味では、本書は研究者としての良心に満ちている。それを支えているのは、自分が農民の心を代弁しなければ、という使命感である。この農民への思いは、何人と雖も批判することはできないであろう。人類学者としての枠を超えて発言する著者の勇気は、自文化研究者ならではのものと言える。

改革開放政策も村人に大きな変化をもたらした。人民公社の解体と市場経済の波は、集団経済を弱体化させ、幹部の権限を縮小させた。その結果、再び家族や宗族の重要性が増すこととなった。農村部における宗族の動きに対して、政府は中央、省、県、郷のいずれも、明確な態度を示しておらず、なかば黙認している状態である。こうした状況と反比例するかのように、少なくとも郷村レベルにおいては、政治的統合力が弱まっている。この村でも宗族組織の再編が行われ、新

たな石碑の建立や族譜の編纂が行われた。村レベルを超える李姓一族の関係も再構築された。村の幹部も全員、李姓の者が占めるようになった。宗族と姻戚のネットワークは、生活の安全を保障する制度の一つであり、経済発展の手段として活用されるようになった。

農村部における変化はこれだけではない。結婚年齢が早まったこと、女兒の間引きによって生じた男女比のアンバランスと、結婚において女性の側の立場が上昇したこと、窃盗や子供や若い女性の誘拐など治安の悪化、貧富の格差の拡大などがある。こうした社会不安と連動して、キリスト教も急速な勢いで普及している。この地域には一九世紀からキリスト教の布教の歴史はあるが、入信者が多くなったのは、改革開放以降になってからのことである。蕭県には、一九九三年の時点で教会が二箇所、聚会所が四十七箇所あり、信者は一万二〇〇〇人で県人口の一・二パーセントを占める。実際には、政府が把握していない家庭での集会が数多くあり、その数はもっと多いであろう。信者の多くは文字の読めない年配の女性らで、病氣や家族の不和が入信の動機となっている。信者にとってキリストの教義は問題ではなく、神を崇拜し、賛美歌を歌うことによって、福祿寿が手に入ればよく、聖職者の側も「東方紅」を替え歌にし、歌詞で毛沢東のところを

イエス・キリストに置き換えて使っているという。

著者は二〇〇七年の訪問以来、七年ぶりとなる二〇一四年にも村を再訪し、都会への出稼ぎによつて経済的に豊かになったことによる変化も記録している。例えば、家の建て替え、テレビや冷蔵庫などの家電の普及、太陽光湯沸かし器によつて毎日のシャワーが可能になったこと、スーパーマーケットが出現し、その結果としてこれまでなかったゴミが発生し、その多くが河に棄てられ、ゴミ処理が問題化していることなどなど。

終章では、観光人類学との出会いと、毛沢東の神格化の問題に関する調査について語っている。これは著者にとつて、村レベルから社会主義革命を問い直す作業の対をなすものである。即ち、社会主義政権が社会動員の手段としてどのような言説やシンボルを生みだし、それがどう変遷していったかを追うことにより、末端側と政権側とをリンクさせようという訳である。もつとも、迫力の点では末端側の視点の方がはるかに勝っている。

東北地方の都会育ちの著者にとつて、淮北農村の世界は、「異文化」といえるほど異質な世界でもあった。しかも、日本在住の方が長くなると、どちらがホームなのか、分らなくなる。両方の視点をもった著者には、是非、日本の社会や文

化を論じてもらいたいと思う。また、本書を読めば、著者が書いた民族誌も読んでみたいと思うことであろう。民族誌は中国語に訳されているが、日本の読者としては日本語版が待ち望まれる。

本書はもちろん、フィールドワーク論として読まれるべきであるが、上述の如く、中国社会の現代史、とりわけ底辺である農村部の実情や中国社会の特質などを理解する上でも格好の書物となっている。しかも、教科書的ではなく、著者と農民らの生の声で構成されているため、読み易いにも関わらず、重みがある。大学院生時代から著者を知る者として、ある種の感慨と心地よい感動をもつて本書を読み終えた。それは本書を読む全ての人が持つ印象であろう。

(にしざわ・はるひこ 武威大学)